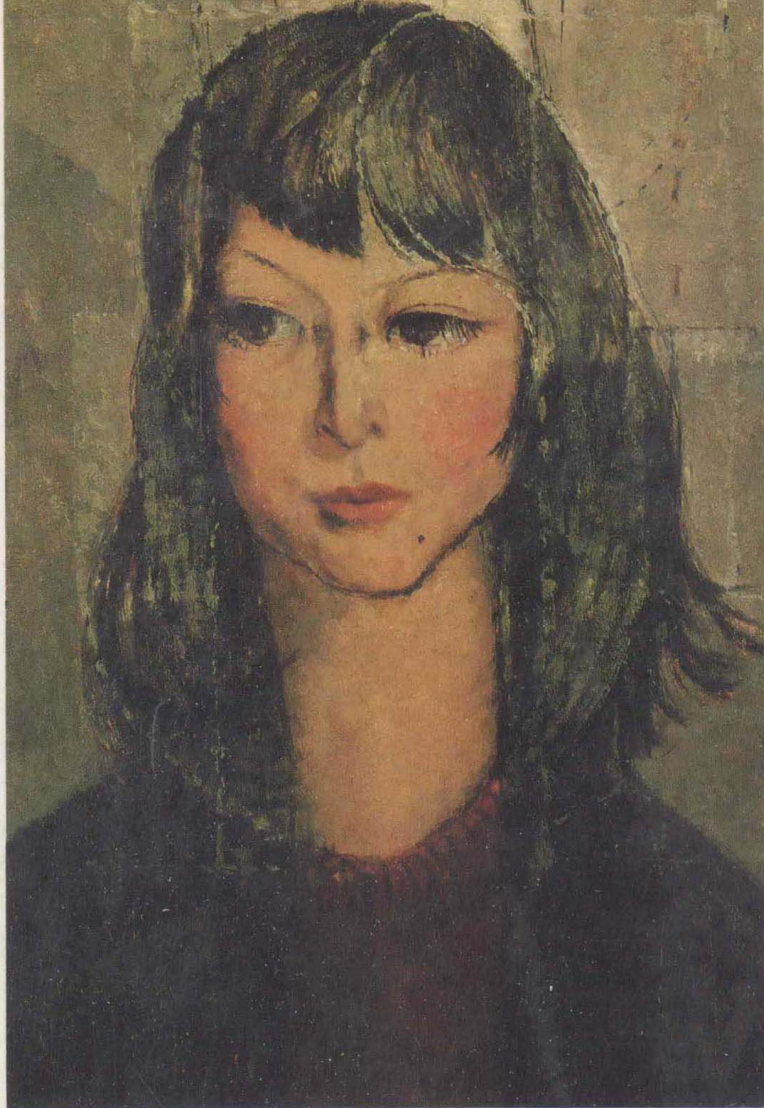


石川達三



その愛は損か得か

新潮社版

川達三

新潮社

その愛は損か得か

その愛は損か得か

著者 石川 達三（いしかわたつぞう）

昭和五十七年 四月二十日発行

昭和五十七年十一月二十日八刷

発行者 佐藤亮一

印刷所 錦明印刷株式会社 製本所 加藤製本株式会社

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一一 編集〇三(266)五四一一

定価 一三〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

その愛は損か得か

扉の上の呼鈴が小さな音をたてた。気の弱い鳴らし方である。充根は反射的に壁の時計を見た。十時を二十分も過ぎてゐる。夜の十時過ぎは他人を訪問する時間ではない。殊に、未婚の女が独りで暮しているマンションを訪問する時間ではない。相手は誰とも解らないが、かなり非常識な人物であるに違いない。その非常識は本人にも解っているから、呼鈴はほんの少ししか鳴らさなかつたのであろうか。それならば相手は女かも知れない。

充根は湯上りのパジャマの上に、水色のガウンを重ねていた。来客を迎える姿ではないが、取りあえず襟を掻き合わせながら戸口まで行つて見た。鍵はかけたまま、要心ぶかく外に向つて声をかけて見る。

「どなた？」

「わたし……」と外の人は答えた。女の声である。「こんなに遅く……御免ね」

声の癖で、見当がついた。「諷子？」と言いながら、彼女は鍵を開けた。

「そうよ」と開いた扉の間から派手な洋服の、健康そうな小肥りの女がはいつて来た。夜の闇の中から赤い大きな牡丹の花がはいつて来たようであつた。

「あら、今晚はひどく綺麗ね。今ごろまで、どこへ行って来たの」

「ホテルの帰り……」

「どこのホテル？」

「訊かないで。内証なの」

訊かれたくないようなホテルなら、大体の見当は付く。どうせ独りではなかったのだ。中林諒子はまだやっと高校に入った位の頃から、既に異性関係が有った。同級生はみんなそれを知って居た。しかも相手は二人や三人ではなかった。それくらい、以前から魅力的な女であった。諒子は生れつき、古めかしい貞操観念などというものを、持たない娘であつたらしい。或いはもっと意識的に、貞操観念を輕蔑していたのかも知れない。あの頃から現在まで、既に七八年も過ぎてゐる。しかし彼女は今もなお、多分独身である。或いは、貞操観念を輕蔑しているからこそ、独身を續けて来られたのかも知れない。

もともと貞操観念などと言うものは、一文にもならない観念である。一夫一婦という婚姻の風習が、文化社会に定着してから発達した女性道德であるらしいが、同時にそれは女性の（自己防衛）の意味をも含んでいた。要するに根本的には女たちの利害打算である。離婚乱婚の時代には貞操観念という思想はどこにも無かった。だから中林諒子は一種の（先祖帰り）みたいなものである。

「珈琲飲みたいな」と諒子が言った。「インスタント・コーヒー無い？……有つたら一杯頂戴よ」「有るよ」と充根は椅子から立った。「湯を沸かすからね、二分待つて……」情事のあとで疲れて居るのだろうと彼女は思った。彼女自身には情事の体験は無いが、知識だけは腐るほど沢山に持つて居る。出版物、映画、テレビ、宣伝ビラ、近ごろは見るもの聞くもの悉く慾情の色で塗り

つぶされている。商業主義が性と結びついてしまったのだ。そのうえ女という女がみな娼婦のようににだらしくなってしまった。昔の売春は女性個人の私的營業にすぎなかった。今では大資本が株式会社を組織して、若い女性の性をことごとく商品にってしまった。買手はいくらでも居る。けだものの世界に売春は無い。人間の女性はけだものよりもっと非人間的になってしまった。有史以来の人類の墮落である。

湯が沸いて来るのを待つあいだに、充根はためらいながら言つて見た。

「その人さ、誰だか知らないけど、あんた結婚する氣、有るの」

「結婚?……飛んでもない」と諒子は言つた。「そんな氣、毛頭無いよ」

「だってさ、ホテルへ行つたんでしょ」

「そうじゃないの。疑がわれても仕方がないけどさ。前からうるさく付きまとわれて、困つていたのよ。だからこれっきりで、もう絶対にうるさくしないう言う約束なのよ。あんた知つてるでしょうあの男、姫野聖吉」

「あの役者?……あのけちな男?」

「そうよ、役者だからね、どこまでが本心なんだか解りやしないのよ」と諒子は言つた。「……役者というのには心にもない嘘をつくのが商売だからね」

女ごころをとろかすような甘く優しい言葉であろうと、大の男をも慄え上らせる悪鬼のような台詞であろうと、朝飯前の自由自在。テープ・レコーダーの歌と同じで、本人の心とは何の関係もなく、口先ばかりの技術だから、役者の話術などでたぶらかされるのは、役者が悪いのではなくて女の方が悪いと言うわけだ。狐は人をばかすが当たり前であり、ばかされたらその人間の方が馬鹿なのだ。

「姫野聖吉はあんた、奥さんがあるのよ。子供も有ったはずよ」

「知ってる」と諒子は呟いた。「この珈琲、やつぱりまずいね」

即席の珈琲がそんなに旨いはずはない。けれども諒子には珈琲の悪口を言う資格は無いはずだった。つい一時間まえに彼女は即席の情事をたのしんで来たばかりである。諒子がどこで何をしよう、それは諒子の勝手、諒子の自由な生き方であって、充根が文句を言う必要は無い。無いけれども、相手が役者の姫野聖吉というのでは少し悲しかった。姫野は一種の美男子で、姿も声も綺麗ではあるが、性根がどこか卑しいのだ。高い夢、美しい理想がどこにもない。だから彼女に言い寄る時にも、女の肉体を求めるばかりで、女の愛を求めてはいない。姫野は充根に言い寄ったこともある。彼は充根という女をまるで解っていないかったのだ。あの軽薄な男は、女は誰でもみな同じだと思っていたのかも知れない。そのとき彼は充根の耳元に顔を近づけて言ったものである。

「ね、大鹿君、ね、僕という人間をいつべん知って見てほしいんだ。ね、決して後悔させないから……」

「だめよ」と彼女は答えた。「……これ以上後悔なんかしたくないわ」

姫野は馬鹿ではなかったから、二度と充根に言い寄ることはしなかった。つまり困難を避けたのである。その分だけ積極的に中林諒子を責め立てたようである。そして今夜、一つの結着があった。二人の間に愛が有ったか無かったか。

「諒子、あんた損したんじゃないの？」

「別にわたし、損したとも思わないよ」

「姫野が得をしたんじゃないかしら。あんたいくらかでも姫野さんを愛していたの？」

「『愛した』と思つてはいないけど、何も無かつたと言つても嘘になるわね」

心と心との愛が有つたとは思わなければ、皮膚感覚だけのかすかな愛までも無かつたとは言えない。たとい三十分でも二十分でも、諒子は姫野と抱きあつて居たのだ。

「だからさ、あんたは損をしたのよ。姫野はあんたを欲しがつて、結局あんたを手に入れたんだから、今ごろは得意になつてゐるでしょうよ」

「私は損なんかしないよ」

「損にきまつてゐるじゃないの。あんたどうしてそれが解らないのよ。女が得をするのは結婚している時だけよ。結婚以外の関係では全部女が損なのよ。だから女は氣をつけないといけないのよ」

昔はそうでない事もあつた。内縁関係で女が出世したり、私通の関係で位階勲等をもつたり、氏なくして玉の輿に乗つた女がいくらでも有つた。今でも少しは有るかも知れないが、それは競馬場で買う馬券のようなもので、損か得かと言えば先ず以て損にきまつてゐる。

諒子には悪い噂がたくさん有つた。彼女は自分をかくそうとしないから、噂は誰でも知つてゐる。卒業した美校の先生とも何か有つたらしいし、諒子が勤めてゐる婦人服専門店の裏側の、タクシー会社の社長とも何か有つたらしいと聞いている。（私は損なんかしない）と諒子は平然としてゐる。それは諒子の図太さではないのか。けれども充根はまだ一度も中林諒子が妊娠したという話を聞いたことが無かつた。諒子は産ま^ぬず女なのか。自分で産ま^ぬず女と解つてゐるから、安心して不身持を繰り返しているのかも知れない。

けれども大鹿充根はなぜそれほど諒子の情事を追及したがるのか。それは単なる興味ではなくて、彼女の嫉妬であつた。姫野聖吉などという軽薄な役者について、彼女は何の関心も

持つては居ない。その男と諒子とがどこでどんな情事を繰返そうが、充根には何の利害もないし何の興味もない。けれども彼女にも嫉妬だけは有った。嫉妬は理窟ではない。嫉妬は女の心臓の片隅から沸き出して来る、苦い分泌物だ。そして次第に呼吸困難を起す。充根は諒子に嫉妬していた。

嫉妬を感じたのは充根のからだにも慾情のたかぶりが有ったからだ。慾情のたかぶりは致し方ない。諒子と対座して居ればつい一時間まゑの、諒子の情事の姿を考えない訳にはいかない。嫉妬とは羨望である。充根は諒子の自由さが羨しいのだ。諒子は誰にも囚われることなく、自分にさえも囚われないで、その慾情をたのしんでいる。それが充根にはできなかった。彼女は自分に囚われていた。姫野聖吉などの愛撫によつて自分のからだを汚してしまうのが嫌だった。死んでも嫌であつた。からだはまだ洗い流すことができて、心の汚れは彼女の背骨にまでも黒い痣をつけてしまふだろう。

その気になりさえすれば充根もまた、いますぐにでも自分の若い慾情をたのしむことができる。条件はそろつている。皮膚も乳房も唇も腿も恥部も、諒子と同じだけの条件はみな持つてゐるのだ。けれども淵に身投げをするようにして情慾に身をひたした時、その陶醉のあとに何が残るか。恐らく何も残りはしない。やがて男は口笛を吹きながら悠々と立ち去つて行く。女にはただしらじらとした孤独とけだるいような疲労と、そして何程かの後悔が残るに違いない。……直接の経験は無いけれども、それが解つてゐるから、充根はどうしても諒子のように自分を解放してしまふことができなかった。

慾情の誘惑に耐えて居ると、からだが火照つて来る。脇の下を汗が流れる。けれどもその慾情を享樂してしまえば、やがて後悔にからだが冷えて来るに違いない。いま諒子は心にもない情事

のあとで、胸も腰も冷たくなっているのではないだろうか。

「あんたまさか……」と充根は小さな声で言った。「まさか、おかねなんか貰ったんじゃないでしょうね」

「おかね？……貰ったわよ」と諒子ははつきりと言つてのけた。「貰ったって別に悪いことは無いでしょう」

「そんならあんた、……そんなら売春じゃないの」

「売春が何が悪いのさ」と諒子は言つた。「誤解しないで。売春がどうしたのよ。別に何でも無いでしょう」

「あんたこそ誤解しないで。売春がどうして何でもないの？……あんたの人格というものは一体どうなるのよ」充根は全身が熱くなつていた。彼女の憤りの、半分は嫉妬であつたかも知れない。憤りの中に一種の陶醉があつた。「恥しいわ。あんたそれを恥しいと思わないの？」

諒子はふてぶてしく坐り直して、ゆっくりと煙草に火をつけた。それから自分の売春行為について諄々と解説をはじめた。

「あんたにそんな事を言われたのでは、私も黙つて居られないわ。一体売春ってどんな事なの。私たち裁判官じゃないんだからね、裁判官みたいな形式的な事じゃなく、女の立場で本当の売春とはどういう事なのか。それを考えて見てちょうだいよ」

（献身）こそ女性の本質である、昔の哲学者は語っている。メソポタミヤ地方に於ける最初の売春は、神殿の中で行なわれたと言う。そして売春の代価は神に捧げられた。日本に於ける最初の売春婦は巫子であつた。そしてその売春行為は、五穀豊穡を祈願する為の行為であつた。その頃の売春は女の神聖な行為であつたのだ。女性は直接神とつながつていた。そして十八世紀のヨ

ーロッパに在つては、歌手や女優は（衣裳をつけた売笑婦であつた）と言われている。

売春とは何か。……もしも代価の受け渡しが無ければ、その女の行為は売春ではない。即ちそれは二人の愛の行為である。それは肉体の行為であると同時に精神の行為である。それまでは赤の他人であつた二人の者が、結びついて（一体となる）行為であり、神の許し給うところである。だから（その日限り）（その場限り）という事は有り得ない。その女が何日かの後に再びその男に出会つた時、彼女は男の愛のくり返しを拒み得ないだろう。既に二人の間には愛があり、二人の間は特殊關係によつて強く結ばれている。女の愛の行為は、彼女の心を男に結びつけてしまうのだ。

「それが嫌だから私はわざと、姫野からおかねを貰つたの。本当はおかねなんかちつとも欲しくはなかつたのよ。私は飢え死にしたつてからだを売つたりなんか、しないよ。そうまでして生きていなくてもいいの」

姫野から代価を受け取つたのは、姫野と縁を切りたかつたからだ。娼婦というものは相手の男と、からだの關係は有るが心の關係は無い。代価の受け渡しが終れば同時に肉体の關係も切れる。そして元の通り、赤の他人に戻る。心はもともと赤の他人である。だからその娼婦は翌る日にどこかで相手の男に出会つても、堂々と彼を拒否することができる。昨夜の行為のくり返しは有り得ないのだ。

だから中林諒子は敢て姫野から代価を受け取つたと言うのだ。「それでも私を売笑婦だと言うの？……売笑婦にもいろいろ有るらしいわね。からだを売つたおかねで生活したら、精神の独立も無くなるわ。私は姫野から貰つたおかねを救世軍に寄付して来たわ、全部。つまり神様に捧げたのよ。いくらかは神様のお役に立つでしょうよ」

キリストは愚かなる民衆を救済する為に、自分は十字架にかけられたと言う。仏教説話の中には飢えた虎を救う為に、身を挺して虎の餌食になったという聖者の話もある。それならば中林諒子の売春もまた聖者の行為に近かったと言えるかも知れない。

諒子は高校から美術学校へ行って、服飾デザイナーになっている。女のファッションとは何であらうか。女の流行というものは中林諒子の貞操と同じように、有ると思えば有り、無いと思えば無いようなものであった。今年の秋は茶色が流行だと言って見ても、茶色に必然性も無いし必要性も無い。ただ大鹿充根の貞操のように、自分で大事にし自分で満足しているだけの事であった。パリのファッション・メーカーが焦げ茶色を宣伝すれば、東京の女たちが忽ちその真似をする。女のファッションとは伝染病のようなものであった。伝染病ならば人は避けようとするが、ファッションならば女たちは先を争って伝染を受けようとする。だから諒子の居る店はいつでも繁昌していた。

女の服装は無貞操になり無節操になって来た。女子学生も奥様も未亡人も酒場の女も、同じような髪かたち、同じ衣服に同じ靴、同じ化粧をして同じ言葉語り、同じ毛皮を着て同じ耳飾りをぶらぶらさせている。だから諒子の店はただ一筋にパリの流行を売りつけて居れば間違いは無かった。つまり諒子は店に来る女客を馬鹿にしていた。馬鹿を相手に商売するのは簡単であるが、退屈であった。

ファッションとはユニ・フォームである。兵隊と同じだと彼女は思っていた。兵隊たちは知的でないからお互いに同じ服を着ている事に安心している。去年の服を脱がせて今年の流行服を着せてやりさえすれば、女たちは喜んで何万円でも払って行くのだ。だから諒子の店の商売は巧く行って居たが、彼女は女というものに絶望していた。彼女の作る流行衣裳は女たちの姿を綺麗

にしてくれるけれども、女たちの内部までとはいって行かない。却って、彼女らの精神の空白がまる見えになつてゐるのだ。

「あら、ずいぶん遅くなつた。もう帰るわ」

「うむ、寒いから気をつけて。危いからタクシーで行きなさい」

「なに読んでるの？」と諒子は小机の上の本を指さして言つた。

「これ？ 源氏物語」

「むずかしい物を読んでるのね。面白い？」と諒子は派手なコートを羽織りながら言つた。

「ちつとも面白くない」

「ふむ……面白くないの？」

「猥褻よ。平安朝の男はみんな女たらしで、女たちはまたみんな、誘惑されたくてじたばたしてゐたのね。それを綺麗な言葉で飾つてあるだけ」

「人間なんて、いつの時代でもそうなのね」

「そうらしいわ」

「私だつてそうかも知れないわ。さようなら」

ドアが閉まると充根はしんと淋しくなつた。（寝よう）と彼女は思つた。諒子は（私だつて、誘惑されたくて、じたばたしてゐる）のかも知れないと言つた。充根だつて本当はそうかも知われない。しかし彼女は気むずかしい女だつた。既に婚期には遅れているが、あわてもしないしあせりもしない。本当は結婚など、どうだつていいと思つてゐた。一つの愛を胸に抱いて、決して自分を曲げる事なく、静かに生きて行くつもりだつた。この愛は損か得か。自分でも解らない。解ろうとも思わない。朝が来たらまた大学の図書館に勤めに行く。居間の灯を消して、隣の小さ

な寝室にはいる。誰にも見せたことのない独りきりのベッド。女臭いベッド。寒い夜だった。ころも片敷き独りかも寝ん。大鹿充根は二十四歳。しっかりと孤独を守っていた。

充根の父の大鹿哲次郎は山陽理科大学の教授で、建築構造力学の大家であった。東京は年ごとに人口が増加するが、人間の住む土地は少しも増加しない。従って今ではもう人間と人間とが上下に重なり合って生活するより他に方法は無くなっていた。事務所もホテルも工場も住宅も、七階十階十三階と、次第に天国に近づいて来た。その天国もやがて地獄に近づいて行くかも知れない。大鹿教授の構造力学はその地獄を支える柱だった。昔はそんな学問は無かった。大仏殿でも五重ノ塔でも、棟梁の直感と大工の技術とで、何でもやってのけた。

今はそうは行かない。魔術のような数学を駆使して、構造計算強度試験張力撓力耐久力耐熱耐圧力耐撓力弾力復原力、ありとあらゆる条件を綜合して、起り得るすべての危険から建造物を守らなくてはならない。大鹿教授は瘦軀鶴の如く、頭が大きくて背ばかり高く、大風の日は道を歩くのが危いように見えた。建築関係の学問以外には何の趣味も無い朴念仁で、三日に一瓶ずつウイスキーを飲んだ。教授は東邦建設という大建設会社の顧問をしていたが、毎月一度会社からスコッチ・ウイスキーが一ダースずつ届けられていた。

時折大学院の学生たちが三四人で教授を訪ねて来た。半分は学問のために半分は只の酒を飲む